

# EVERYONE IS WELCOME!

—自由に集まり、自由に学び、自由に話せる  
多言語・多文化学習がコンセプトの  
開放型学習エリア グローバル・コモンス—



多言語・多文化を体感したい、英語など外国語のスキルを磨きたい、そんな学生なら誰でも自由に利用できるのがグローバル・コモンス。ホワイトボード、プロジェクター、DVDプレーヤーなどの設備も使えるのでグループワークにも適しています。図書館1階にコンシェルジュも常駐。わからないことは何でも尋ねられ、初めてでも気軽に利用できます。

## 主な活動

### ● ランゲージ・エクステンジ

—私もあなたのことを勉強したい!—

相手を見つけ、お互いの言語や文化を学び合う活動。掲示板には、勉強したい言語、教えられる言語を書いた紙がたくさん貼り出されています。希望と条件に合う人が見つければ、コンシェルジュが仲介するシステムです。

### ● ちょっとシネマ

さまざまな国の映画を20分ずつに分けて上映。映像やストーリーから、異文化をちょっと覗いてみましょう。

**場所** 大学内図書館1階  
グローバル・コモンスエリア内

### ● Mカフェ

—いろんな言語でおしゃべりしよう—

「多文化(Multicultural)・多言語(Multilingual)・みんな(Minna)のカフェ」がコンセプト。言葉や文化で気になること、不思議なことなど何でもおしゃべりに来てください。曜日によりさまざまな言語スタッフが待っています。

アフリカンフェアなど上記言語にまつわるフェアも、定期的に開催。各国、各地域からの留学生が民族衣装を身にまったり、展示物や映像を使って自国の文化を紹介します。

### ● さまざまな文化の人とつながろう 外国語スキルアップ講座

授業外の時間を上手に利用。経験豊富なネイティブの講師を相手に楽しく実践的に外国語が学べます。

**場所** 図書館3階 グループスタディールームB

### ● 図書館について

本学では、現在約37万冊の書籍と約5千タイトルに及ぶ雑誌を所蔵し、このうち約14万冊の書籍は閲覧室書架に配架され、自由な利用が可能です。

また、高度化した図書館機能を利用するための講習会を開催し、各種情報検索サービスやレファレンスなど学生への学習支援、研究者への研究支援、さらに学外者・卒業生・地域へのサービス等を展開するためにリフレッシュしました。附属図書館は、まさに「知への探検」と「知と遊ぶ」基点として、本学における高度な学術活動を支えています。

詳細は図書館HP (<http://www.lib.kit.ac.jp/>) をご覧ください。



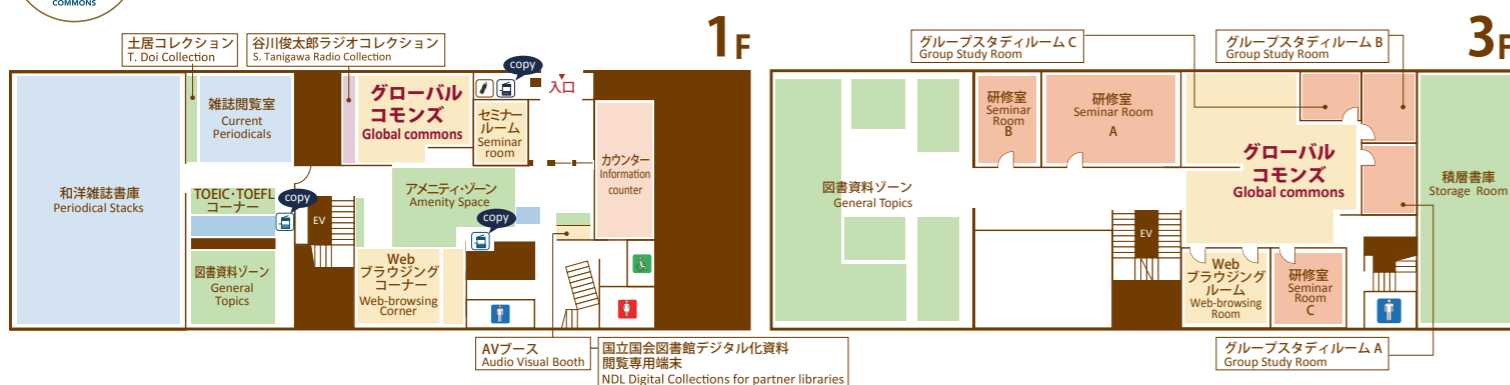
アフリカンフェア



アーサー・ビナード氏おはなし会



## MAP



## 今こそ必要な多文化・多言語学習。 世界に通用する対応力とリーダーシップを養うために

### 異文化の人たちとの共生は 自転車に乗ることに似て

現在、30カ国・200名ほどの留学生が学ぶ本学において、2014年4月に開設された「グローバル・commons」。その企画・運営を担うのが澤田美恵子教授です。澤田先生は予てより、グローバル化が急速に進む現代にあって、大学にこそ多文化・多言語に触れる施設を作る必要性を提言。本学がスーパーグローバル大学に認定されたことをきっかけとして、実現にこぎつけました。「今は日本(国籍)-日本人(人種)-日本語(言語)という図式だけでは成り立たない時代。単一の言語と文化で一生を過ごすことはもはや困難ですし、日本人だと思われる外見でも違う言語を話されていたり、西洋系の外見だから日本語は話されないだろうと思って流暢な日本語を話されたりと、予想外のことに合うことが多くなりました」。そのことを頭では理解していても、あまりに急な変化のため気持ちがついていかない人が多いのも事実。「まずは実践です」と先生。「多文化・多言語の人たちとの交流や共生は、実は自転車に乗ることに似ています。自転車は、最初は人の手を借りて恐々練習しますね。でもいつか人の手が離れ、補助輪が取れて、気づかないうちに一人で走れるようになっている。いったん走れるようになればどこまでも遠くに行けます。できるならば社会に出る前に自転車に乗れるようにしておきたい。だからこそ大学という組織にこのような取り組みが不可欠なのです」。



基盤科学系 澤田 美恵子 教授

### 語りかけの能力を養うことは リーダー的人材の育成にもつながる

「異文化の人たちへの語りかけの能力は、コミュニティの問題解決や異なるコミュニティとコミュニティを結びつけ、場の特徴を生かした活動のできるリーダーとなるための素養となります」。異文化との共生が普通のこととなりつつある国内で、そして海外で、本学の掲げる「リーダーシップをもってプロジェクトを牽引する国際的・高度技術者の育成」を図る観点からも、「グローバル・commons」の活動には期待が寄せられます。

「もっと多くの学生に認知され利用してもらうため、これからは映画や音楽、食などをテーマとして、親しみやすく楽しいイベントも積極的に開催したいと思っています」。グローバル・commonsの門戸はさらに広く開放されます。



### 世界への扉を開こう

「本学は理系ということもあるのでしょう、多文化・多言語ということに苦手意識を持つ学生の多いことが、学士力アンケートでも明らかです。それだけに、このような場所がなければ、自分から積極的に異文化の人たちへ語りかけることはなかなかないのではないのでしょうか。その意味でもグローバル・commonsは大変重要です。実際、先のアンケートには、思い切って利用してみたらとても楽しかった、という意見がありました。学生には、コミュニケーションが苦手ならばその意識をやわらげ、興味があればさらにそれを深める、そんなきっかけをここで掴んでほしいと思っています」。



基盤科学系  
伊藤 翼斗 講師

## 世界の人と交流する手段として 広くゆったりとした意識で外国語を学ぼう

### 語学が好き、もっと勉強したい そんな願いを叶える場所

「外国語スキルアップ講座」を企画・運営する深田智准教授。「外国語をもっと勉強したい、というとき、本学は理系の大学ですから、授業以外に学べるチャンスがそれほどないんです。語学学校へ行くのもひとつの手ですが、学内で勉強できる機会がひとつでも多くあるほうが良いだろうということで、5年前にスタートさせました。今までは英語に特化して、英語が苦手な学生にも興味を持ってもらえるよういろいろ企画しながらやってきました」。そこに図書館にグローバル・commonsエリアが誕生。「1階はみんなが出入りして利用しやすいので、きっかけ作りはそちらにお任せして、3階では、さらに勉強したいと思う学生を対象に、学べる外国語も増やしました。階段を上がって来るというのは、それだけ勉強したいという意欲が高くないとできないことだと思いますので、3階はちょうどいいように感じます」。明確な役割分担が、グローバル・commonsをより機能的、効果的にしています。



基盤科学系  
深田 智准 教授

### 自国の文化を知るインプットと 発信するアウトプットの両立を

先生は2005年から、「京都の文化遺産をテーマとする多文化共生プロジェクト」の一環として、アクティブ・ラーニング型の授業科目である「京の文化行政」「京の伝統工芸 技と美」「京の伝統工芸 知と美」「京の伝統工芸 知美技」を展開。日本人学生と留学生が共に伝統工芸の工房で職人技を体験したり、茶道や華道などを体験・実習することで日本文化への理解を深めること、異文化を理解しようとする力を養うことを目指しています。「その授業がインプットであるならば、グローバル・commonsの取り組みはアウトプット。日本人として日本の伝統文化を知ること、自信を持って異文化の人たちと交流することができますし、相手の文化への関心も高まります。ちゃんと伝えられるものがあると会話が弾み、それは私が学生に期待する、「異文化の聞き手への語りかけ」の能力につながります」。グローバル社会に対応するには、インプットとアウトプットの両方が大切といえます。

### 身近な話題で語り合う楽しさと 伝わる喜びを体感しよう

本講座ではネイティブの講師のもと、自分の考えを外国語で話す場面が設定されます。自己紹介をしたり、身近な話題や研究の話で盛り上がったことも多いそう。どの外国語のクラスも基本的に週に1回開かれ、来られるときに参加すればいいシステム。「勉強したいときにいつでもどうぞ、というスタイルです。楽しいと言って5年間続けている学生もいれば、留学前に勉強に来る学生もいて、利用の仕方は本当にさまざま」。クラスにはサポーターの学生が必ずいて、講座の準備や、参加する学生のフォローなどを行っています。先生は、「ここでは、語学をスライクではなく広く緩やかにとらえてほしい」と言います。

### 世界で活躍する先輩から 英語の重要性と「人」として 付き合うことの大切さを学ぶ機会も

さらに、グローバル化が進む現代における英語の重要性と「人」として付き合うことの大切さを肌で感じてもらうため、「Career×English 国際的に活躍する先輩と語ろう」を定期的で開催。「言葉ができれば自分のことが伝わり相手のもも理解できます。人と人が近づくことってうれしいし、伝わると相手が笑顔になってくれる。そして、言葉って便利だなと思えば、苦勞しても伝えたい。そんな気持ちが社会に出たときに実践で役立つのではないのでしょうか。今後の課題は、モチベーションの高い学生だけではなく、特に英語を敬遠しがちな学生に、いかに英語を使ってもらうチャンスを作るか。「英語を使う必要のあるシーンは、これからますます増えてきます。様々な企画を展開してKITの学生をサポートしていきたいと考えています」。